

Kappa Books



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 てやんでえ

昭和41年6月15日 初版発行

昭和50年12月5日 70版発行

著 者 ^{かじ}梶 ^{やま}山 ^{とし}季 ^{ゆき}之

東京都新宿区市谷仲之町38

季節社ビル

出 版 権 者・季 節 社

発 行 者 小 保 方 宇 三 郎

印 刷 者 堀 内 文 治 郎

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀 内 印 刷

発 行 所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © TosiYuki KaziYama 1966

(分)0-2-93(製)02110(出)2271 (0)

長編小説

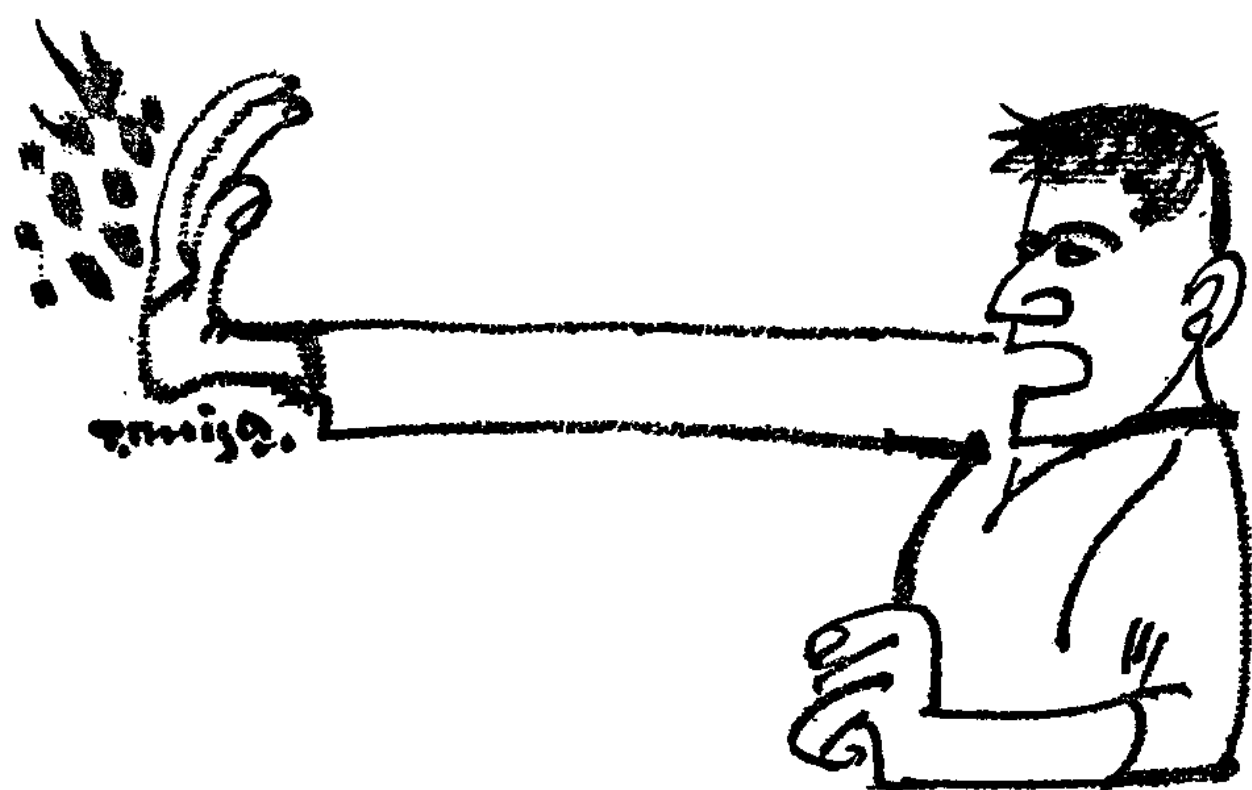
てやんでエ

かじ やま とし ゆき
梶山季之

日本財団支援



カッパ・ノベルス



目次	日本へ来た男	照る日曇る日	商魂	うらおもて	濡れ手で粟	続・濡れ手で粟	毛唐ころがし	コール・ガール	求婚者	ああ日本	エッチな男たち	泣き面に蜂	目には目を	千客万来
	5	32	62	88	124	153	174	203	231	259	282	305	333	361

本文のイラスト

宮永 岳彦みやなが たけひこ

日本へ来た男

——羽田国際空港は、肌寒かった。ビクター・ハマーは、コートの襟を立て、ダレス靴を右脇に抱え込むようにすると、ゆっくりと税関に向かって歩きだした。痩せぎすで、背の高いこの男は、栗色の髪の毛と、碧玉のような瞳を持っている。声は低いくせに、受話器を通すと甲高く聞こえた。

日本へ来るのは、これで二度目である。

最初に来たのは、兵隊のときであった。たしか一九四六年の春である。

ビックは、二年ほど日本にいて、アメリカへ引き揚げたのだが、そのときの感想は、日本とはなんと貧乏な国だろうか、ということだった。

敗戦直後で、しかも二年つづきの凶作のため、日本人たちは、みんな栄養失調にかかっていた。ビックは一番

わるい時期に、日本に進駐していたことになる。

日本の男たちは、そろいもそろって無気力であり、甲斐性なしばかりに見えた。そうして女は——みんな尻軽女ばかりだった。PX（アメリカ軍隊の酒保）で婦人物のナイロン・ストッキングを買って持っていけば、華族と称する令嬢でも、ある媚を示して彼のいうなりに抱かれた。

ストッキング一足で処女を売るなんて、アメリカでは考えられないことだ。ビックはだから、日本人はよほど貧乏なのだと思った。事実、彼は二年間の滞在中に餓死者のミイラのような死体を、何度も見て過ごしている。

税関の係員は、形式的に、

「荷物は？」

ときいた。

「トランクが一個」

彼は、ダレス靴のファスナーを開けた。

係員は、ろくに中身も調べないで、「オーケー」といった。

ホテルだけは予約してあったが、空港にビックを出迎える人間とていない。

ビックが、専用バスに向かって歩きだしたとき、小柄

な日本女性が近づいて来て、

「失礼ですが」

と声をかけた。

「失礼ですが、ビクター・ハーマーさんではありませんか？」

女は、彼の胸までしか、背丈はなかった。年齢はわからないが、たぶん、若いのであろう。

「私はハーマーだが、あなたは？」

「やはりそうでしたか。私……ヤッスーン商会の者でございます」

流暢なキングス・イングリッシュだった。

アメリカ人の彼ですら、英国式のこの発音を耳にする、抵抗を感じる。

「ほう、ヤッスーンの？」

彼は安堵したようにうなずいた。

ビックが日本を訪問する気になったのは、実はヤッスーンから手紙をもらったからである。ヤッスーンは、ユダヤ系の商人で、若いがなかなかの商売上手だという噂であった。

「車を待たせてございます」

女は、ヤッスーンの秘書で野田陽子と名前を名乗った。

車はロールスロイスだった。乗り心地は悪くない。

「日本は、はじめてですか？」

野田陽子はきいた。

「いや、十五年ぶりです。さぞ、日本も変わったでしょうな」

「変わったと思いますわ、十五年ぶりなら」

女は、スカートを短くしているくせに、膝頭が見えるのを、わざとらしく防ごうとしている。ナイロン・ストッキングに包まれたその脚は、朝の光をはじいて、なめらかに輝いている。

「へふむ、悪くない！」

ビックは目を細めた。

最初、気づかなかったが、ヤッスーンの女秘書は、髪の毛を赤く染めていた。指先も、ピンクにマニキュアしてある。

真珠のネックレスの下には、モス・グリーンのスーツがある。ハイヒールの色は、真紅であった。

「へヤッスーンらしい趣味だな。この女秘書は、きっとレースのついた水色のスリッパと、ピンクのナイロン・パントリーをはいているに違いない！」

ビックはそう思った。

良い匂いがした。その匂いには、記憶がある。別れた彼の妻が、よくネグリジェにふりかけていた香水だった。

「いま高速道路を工事中なものですから、道が悪いうえに、都心まで出るのに、国際空港から一時間あまりかかりますの」

野田陽子は、またスカートの裾すそを、両手でつまんで引っぱっている。

「結構です。別に急がない」

ビックは低く応じた。

彼は、スーパー・マーケットに、罐詰かんづつめだの石鹼せっけんだのを卸す商売をしていた。

利幅はうすいが、確実にもうかる商売であった。それにスーパー・マーケットは全米にひろがって、得意先はふえるばかりである。

日本が、いよいよ貿易の自由化に踏み切ったと知って、ビックは、なにか面白い商売はないかと考えたのだった。

そのやさき、東京のヤツスーン商会から、取り引きをしたいが、一度お目にかかりたい、という手紙をもらったのである。ビックは、自分のほうから日本へおもむく

むねを返事した。

しかし、いつ日本へ行くという日時までは、知らせてなかったのである。

彼は、そのことに気づき、野田陽子に話しかけた。

「それにしても、よく私が今朝着くことが、わかりましたね」

ヤツスーンの女秘書は、微笑した。

「旅客名簿を調べるのも、私の仕事の一つでございますの」

「ああ、なるほど！」

ビックは大きくうなずいた。

日本は島国である。従って訪問者は、空からか、海からである。たいていの人間は、飛行機を利用するだろうから、航空会社にコネさえつけておけば、どんな人物が、いつ日本へやって来るかは、手にとるようにわかるのであった。

「ああッ！」

不意に車が、大きくよろけた。

「ソーリー・サー」

運転手が、恐縮したように言った。車輪が穴ぼこにはいったのだった。ビックの手は、野田陽子の膝のあたり

に置かれている。よろけた瞬間、思わず、そこに左手が行ったのである。

「失礼！」

ビクター・ハーマーは、紳士らしく装って詫びを言った。

「いいえ、どういたしまして。ハーマーさん」

ヤッスーンの女秘書は、いつでもお触りください、とでもいうように微笑を絶やさない。それでいて、スカートの裾だけは、相変わらず引っぱっていた。

彼は、惜しいことをした、と思いながら、ゆっくり長い脚を組んだ。

窓の外には、瓦ぶきの、木と土壁と紙で構成された日本家屋が並んでいる。

「この道は、東京と横浜を結ぶ道路だね？」

彼は聞いた。

「よくご存じですね」

「昔、ジープでよく往復した。しかし、そのころは、焼け野原でバラック小屋ばかりだった。窓ガラスもないような——」

「そうでしょうね。しかし、東京は完全に復興しました」

「そうらしいね。ビルも建っているようだ」

「都心をご覧になると、もっと驚かれますわよ」

野田陽子は、赤く染めた髪の毛をゆすり、意味もなく微笑している。

「都心というと、銀座……PXのあった所だなあ」

「ええ、そうですわ」

不意にハーマーは、青い目を右手の建物に投げた。

「あッ、ここは大森だ……」

「ええ、大森ですわ。むかし進駐軍専用の、慰安所があったところですよ」

彼は、野田陽子がそんなことを知っているの、なんとなく薄気味わるくなった。だが慰安所は、彼が進駐する前に、総司令部の命令で閉鎖されており、代わりに名物のパンパンが出没していた。

ハーマーはよく同僚と、衛生器具をふところに、パンパンを買いに行ったものである。金が乏しいときは、海岸べりの草むらで、青カンとしゃれたものだった。値段はたしか、ショート・タイムで、五十円だったような記憶がある。むろん、日本円である。それぐらいの金は、PXでラッキーマン・ストライクを一カートン買えば、右から左に自由になった。

日本の闇商人に横流しすればよかったのである。そのころから、ビクター・ハーマーは要領のいい男だった。

「失礼ですが、遊びに行かれたこと、ごさいますか？」

女秘書は、質問してきた。

「いや、ないんです。それより日本は、アカセンが廃止されたそうだが……そのあとはどうなっていますか？」

「遊郭のあとは、旅館や、トルコ風呂になっています」

「ほう、トルコ風呂？」

「ええ。夜にでも、ご満足できるトルコ風呂を、紹介いたしますわ……」

ビクター・ハーマーは、友人の誰かから、日本へ行ったら、ぜひ一度、トルコ風呂へ行くようにと勧められていた。その友人は、ニヤニヤしていたから、特別な仕掛けがあるのだと、彼は悟っていた。

しかし、ヤッスーンの女秘書は、彼に平然と、そのトルコ風呂に案内する、というのであった。ハーマーは、心の中で低くうなった。

「赤線がなくなっただけ、日本では青少年の犯罪——特に強姦がふえています」

野田陽子は、ニコリともせず、流暢な英語で発音するのだった。

「なるほど。で彼らは、どのような処理をしているのかね？」

「だからコール・ガールや、トルコ風呂が流行しています……」

「ほう……」

彼は、ニューヨークのコール・ガール組織のことを思い浮かべた。ニューヨークでは、売春の料金は高い。食事とホテル代を男が負担して、まず百ドルというところが通り相場である。

京浜国道は、車の洪水だった。

品川駅を過ぎたあたりから、特に混雑している。

「事務所は、どこでしたかね？」

ハーマーは聞いた。

「日比谷です。皇居のそばです」

「ああ、GHQがあった……」

彼は、十七年前のことを、静かに思いだしながら、煙草をとりだしてくわえている。すかさず、ガス・ライターが点ぜられて、鼻先に突きつけられた。

彼は、お堀端の第一相互ビルに、わずかな期間だが、勤務したことがある。

アメリカ大使館から、出勤してくるマッカーサー元帥

を、衛兵として出迎えるのが仕事だった。スタイリストの元帥が、車から降りると大股で、階段を昇って行く姿は、いつも見物人に見守られていた。

もし、その見物の日本人の中に、不心得者がいて、手榴弾でも投げつけたら、元帥は即座に天国に行くはずだった。それをハーマーたちは、警備する任務についていたのである。

彼は、日本の夜の女たちから、千円だせば元帥のサインをもらってやるという、よく金を巻き上げたものだ。

マッカーサー元帥の警備にあたっている兵隊だというので、夜の女たちは彼の言葉を信用した。むろんサインは、彼が元帥のサインを模倣して、自分でやったわけだが、ある日、狩り込みにあった夜の女の一人が、

「私は、マッカーサー直筆のサインを持っている。釈放しないと、元帥に直訴する！」

と、いきまいたところから、ハーマーの悪戯が露見し、「とんでもないやつだ」と配置替えになったことがある。

へふむ。元帥のサインか！

彼は、道路の左右に、鉄筋のビルが多くなったことに目を見張り、日本のめざましい復興ぶりを内心驚いてい

た。あの十七年前の、瓦礫の街は、どこへ消えたのか。

「あれが東京タワーです」

野田陽子は、彼の膝に手をやって、注意を左の窓に向けさせた。

「なるほど……こいつは立派だ」

彼は、東京タワーが近づくにつれて、小さくうなり声をあげた。

それはたしか、小平という強姦殺人犯が、若い女を締め殺したというので、現場を見に行った記憶のある芝公園のあたりに、建てられているようである。

星条旗紙にも、その事件は報じられていたのだが、その血なまぐさく残忍な事件は、むしろ廃墟の東京にふさわしく思えた。

「パリのエッフェル塔より、十メートルとか高いそうですわ……」

野田陽子は微笑した。

「なんに使っている？」

「テレビの発信と、観光用です」

「テレビ？ 日本に、テレビがあるのか？」

彼は驚いて言った。

「ございます。公共放送が二局、民間放送が四局。ちか

く、もう一局ふえます」

「ふーん。この東京に、六つのテレビ局が……」

「不思議ですか？」

「ああ……信じられない」

「そうでしょうね」

野田陽子は、正面を向いたまま、低い声で言うのだった。

「ある学者のかたが、イギリスで、オックスフォードの大学三年生に、会ったそうでございます」

「それが、どうした？」

ビクター・ハーマーは、細い葉巻きをとりだしてくわえた。紙巻き煙草は、ガンのもとになるというので、新しく発売された煙草なのであった。これは、彼が卸している、スーパー・マーケットでも、かなりの売れ足を示している。

「学者の先生が、ヨーロッパ見物に来たと申しますと、その大学生は、西ドイツに行ったかと聞きました」

「ふーん。なぜだろう」

「まだ、行ってないと言うと、ぜひ行きなさい。あそこには、電気機関車があるから、と答えたそうですわ」

野田陽子は、鳩が鳴くような声で、のどの奥で笑っ

た。

「なるほど。日本に電気機関車がないと、大学生は思っていたわけだな……」

ビクも相槌を打ったが、自分が日本にテレビがあるのか、と無教養めいて聞いたことを、彼女が暗に皮肉っているのだと悟ると、口を利く気もなかった。

「日本は、まだよく世界に理解されておりません……」

「かも、しれないな」

「そのオックスフォードの大学生は、日本には、機関車を走らせるだけの技術と電源がない、と思い込んでいたようでございます」

「ふむ！ ばかな大学生だ……」

「住んでいて、自分の口から言うのも変ですが、日本はなかなか立派な立ち直りをしたと思います……」

「なるほど、そのようだな……」

目の前に、田村町の交差点があった。しかし、彼に見覚えがあるのは、NHKと富国ビルなどの建物だけであつた……。

インペリアル・ホテルに荷物をおいて、ビクター・ハーマーは、すぐ近くにあるヤッスン商会まで、案内されて行った。古ぼけたホテルの裏に、スマートな新館が

建ち、アーニーパイル劇場の前にも、後ろにも、横にも、大きなビルが建てられている。

へふーむ！ 変わったもんだ……」

ビックは、日本人を見直す気になった。帝国ホテルの旧館の、建築家ライトが設計した、特徴ある建物がなかったら、ちょっと彼にはどこだか見当もつかなかったであらう。

ヤッスーン商会は、日比谷交差点に面した、古ぼけたビルの四階にあった。ここはたしか、赤十字の売店があったところである。この建物だけは、昔のままの姿であった。

古い建物にオフィスを構えてはいるが、ヤッスーン商会は、百十名の社員を擁した、堂々たる貿易商社である。

ビックは、わずか四十名足らずの人間しかかかえていない、自分の会社のことを思い、これなら取り引きしても大丈夫だ……と考えた。

野田陽子は、彼をすぐ社長室に連れて行った。一見して、マホガニーとわかる、よくみがかれた大きな事務机を前に、顔色が病的に青い、赤毛で小柄な紳士が、帳簿を点検しているところだった。

「社長、ハーマーさんがお着きです」

女秘書は言った。

赤毛の小男は、帳簿の間に、銀製のペーパー・ナイフをはさみこむと、元気よく立ち上がった。

「ご機嫌よう。お目にかかれて、うれしい」

ヤッスーンは、手を差し出した。

「こちらこそ。お出迎え、恐縮でした」

ビックは、丁重にあいさつを返した。

ヤッスーンの左手には、テキサス州産の大豆ぐらいの、ダイヤの指輪が光っている。アメリカ人にとって、ダイヤの質と大きさは、そのまま相手の富の象徴であった。

椅子を勧められた。

ビックは、かつて一兵士として、日本へ進駐したことがある、と語りだした。するとヤッスーンは、肩をすくめた。

「実は、私もそうだ……」

「えッ、そりゃア本当ですか」

彼は驚いて聞き返した。

ヤッスーンの先のとがった鉤鼻かぎばなから推して、ビックは相手にユダヤの血が混じっていることをはっきり知ったのだ。

「私は、これでもアメリカ空軍の情報将校だった。むろん、進駐して三年目には、自分から退職願を書いた……。」

「そうして、以来そのまま東京に住みついていてる」

「ほう。そうだったんですか」

「昔の日本は良かった。われわれが、アメリカから仕入れる商品は、すべて無税だったからね。赤ん坊の手をひねるより、たやすく金がもうかったよ……。」

「いまは？」

「現在は苦しい。だから多くの人間は、アメリカに去って行った。しかし、私はこうして日本に残っている」

ヤッスーンは、不敵な微笑をたたえながら、投げだした足を、足首のところで交差させた。

「葉巻きは？」

「いや、結構です」

ビツクは、初対面から、この赤毛の小男に反発を覚えた。眉毛はうすい。しかし、その下に潜んでいるへそれは、まさしく潜んでいるという感じだった。鳶色の目は、いかにも狡猾な狐を連想させる。

鼻は鉤のように曲がっているし、唇は皿のように薄かった。それに、気に食わないのは、青白い顔の色である。まるでフィンガー・ボールの水の中に、青インクで

も落としたような、そんな人間ばなれした色なのである。

「あなたは、なぜ私だけが、残れたと思いますか？」

ヤッスーンは、内ポケットから葉巻ケースをとりだし、三分の二ぐらい残った一本に火をつけた。良い匂いがした。ハバナ産でも上等なやつである。

「わかりませんね」

ビツクは脚を組んだ。

「私はもうけた金を、浪費しなかった……。株や、不動産に投資したのだ……。人々から冒険だと、忠告されたがね」

年齢は、彼より五つ六つ上だろう。しかしヤッスーンの顔からは、年齢というものは考えられなかった。

ビツクは、意味もなく微笑してみせる。沈黙は、この場合、黄金だった。

「連中が逃げだしたのは……日本が独立をして、デフレの不況期に見舞われたときだ。みんな、資金繰りに苦しみ、倒産した……」

「なるほど？」

「しかし、私には、日本の銀行が、金をいくらでも貸してくれた。株券、それに土地家屋という担保があったか

らだ……」

なぜヤツスーンが、初対面の彼に、そんな自慢話をしはじめたのか、ビックにはよくわからなかった。彼はとまどいながら、秘書の野田陽子が運んで来た、レモン・ティーをすすった。

「いま私の不動産は、ちょっと数え切れないくらいにふえている。市街地の目抜き土地には、もう四つも貸しビルを建てた。しかし、私はこのビルから動かない」

「なぜです？」

「勤くと、日本の税務署は、ヤツスーン商会が黒字だと思うからね……」

赤毛の小男は、薄い唇をゆがめ甲高い声でひとしきり笑った。そのあと、両手の指を組み、からだを乗りだすようにした。

「ところで商談だが……」

「承りましょう」

「あなたの会社で扱っている商品で、オフ製品があったら、教えてもらいたい」

「なに、オフ製品？」

ビックは、碧玉へきぎよくのような瞳ひとみを、ヤツスーンにすえた。オフ製品とは、メーカー自体が、値引きして売ってい

る商品のことである。へ15セントOFFとか、へ30セントOFFというレッテルを張りつけて、スーパーマーケットなどで売られている商品。それは販売競争の激しさが生んだ、いわゆるダンピング商品なのである。

——ヤコブ・E・ヤツスーンは、その名前が示すように、ユダヤ人の血を引いていた。なぜだか、ユダヤ人は世界じゅう、どこへ行ってもきらわれている。

その昔イエス・キリストを売ったときから、それは宿命づけられていたのかもしれないが、第二次大戦が終わり、エルサレムの聖地のある地方を、血と金で買うまでは、ユダヤ人の母国もなかった。

イスラエルが誕生してからは国籍ができたわけだが、それもエジプト、ヨルダン、シリア、レバノンと四カ国に囲まれていて、しかも目の前は地中海であった。インドの山の中のネパールよりは、いくらかましかもしれないが、彼にはどうも祖国という気はしなかった。

なまじっか母国なんてないほうが、気が楽である。

むろん、国籍のない人間なんて、あり得ない。祖父の代に、アメリカに移民し、父の代からヤツスーン家は、れっきとしたアメリカ国籍である。その証拠に彼は、情報将校として、アメリカ軍に勤務していた。

だが——大学でも、軍隊でも、ユダヤ人だとわかる
と、みんなから輕蔑され、爪弾つまはじきされた。

これは彼の、大いに不満とするところであつた。

アメリカは、デモクラシーを標榜する国家である。

そのためには、政治に参加する民衆の人格を重んじ、
自由と平等の權利を尊重しなければ、デモクラシーは成
立しない。

にもかかわらず、ユダヤ系のアメリカ人は、ニグロ
や、プエルトリコや、東洋人とおなじく、白眼視されて
いる。

アメリカ人とは、いったいなんなのか。もしその国土
に、古くから住みついていた人間——がそれだというの
ならば、眞のアメリカ人とは、彼らが博物史的に珍重し
ているアメリカ・インディアンこそ、眞のアメリカ人と
呼ぶにふさわしい。

しかし、われこそはアメリカ人なりと、幅を利かして
いるのは、ほとんどがヨーロッパから渡つて来た貧乏な
移民たちである。その意味で、アメリカ人とは本来、雜
種であつた。純粹な、アメリカ人の血というものが、あ
るわけではない。

白人たちが、有色人種を輕蔑する心理は、わからぬで

もない。ヤツスーン自身、ニューヨークのハレム街で、
黒人の淫売婦に金を支払いながら、一夜をとものにできな
かつた記憶がある。

だが、ユダヤ人は、白人であつた。れっきとした白人
であるのに、雜種のアメリカ人どもが、自分たちを、
「あいつは、ジューだ……」

と輕蔑する心理が、どうしてもわからない。

いくら、キリストを売つたのが、ユダヤ人であろうと
も、それは何世紀も昔の話だ。同じ色の白い人種に、惡
人呼ばわりされるのは、合点がいかない。

その点、アメリカと違って、日本は住みよかつた。

「お国はどちらで？」

と質問されれば、

「アメリカです」

と答えればよい。

それだけで日本人たちは、うらやましそうな、ちよつ
と敬意を払うような目付きになって、それ以上は詮索し
ようとしない。

ラテン系だとか、アングロ・サクソン系だとかいう出
生についても、無関心なのである。いや、それよりも戦
後から引き続きアメリカ軍に占領され、現在もなお駐留